

## テレビ会議システムを活用した伝え合う力の育成に関する考察

台湾・淡江大学日本語文学系

施信余

hsinyu@mail.tku.edu.tw

キーワード：テレビ会議システム、遠隔教育、コミュニケーション能力、学習動機、学習意欲

### 1. はじめに

外国語環境で学ぶ場合、その言語は実際の生活では用いられていないため、「教室習得環境」での学習となるのが普通である。外国語環境で言語を習得する際、どのような部分が環境的に不利であり、それはどのようにすれば克服できるかということを考察するには、様々な環境要因が言語習得にどのような影響を及ぼすかといった研究がその手がかりを与えてくれるであろう。

例えば教室習得環境は、言語知識を得るにはよいが、実際にその言語の母語話者とコミュニケーションを行う言語運用場面に乏しいため、意味の語用論的な側面の習得が困難になると思われる。具体的な解決策としては、テレビ会議システムを用いた遠隔教育を導入し、外国にいながらにして日本にいる日本語母語話者との接触場面を仮想的に作り出す方法などが考えられる。

本研究では、淡江大学、早稲田大学、慶応大学、北京大学を結び、実際にテレビ会議システムを使った日本語と中国語による交流の実況と学習者を対象としたインタビューの内容を振り返り、テレビ会議システムを用いた言語教育のあり方とその限界、コミュニケーション能力や表現力の向上を実感させるにはどのような工夫が必要かを考察することを目的とする。

### 2. テレビ会議システムを用いた遠隔教育

テレビ会議は、インターネット回線や電話回線などを利用して、離れた地点にいる者同士が、リアルタイムに映像や音声をやりとりしながらコミュニケーションすることである。テレビ会議システムは一對一の双方向のやりとりを前提とするが、最近では多地点で複数の参加者によるテレビ会議も可能となってきた。

通信回線が整っていれば、国内はもとより外国ともテレビ会議を利用して、情報を入手したり双方向のコミュニケーションをしたりすることができる。学校においては、専門家による「遠隔授業」、交流を含めた他校との「共同学習」の媒体として学習においても大いに利用することができる。

テレビ会議を利用した授業を組み立てていく上で、「参加者」「相手」「授業形態」の三つの要素がテレビ会議を利用した授業を構成すると考えられる。「授業形態」については、大きく「遠隔授業」と「共同学習」の二つに分かれる。「遠隔授業」とは、専門性を持ったゲストティーチャーが、直接情報提供や解説をしながら、教室の枠を超えて学習する形態であり、教えられる側と教える側の立場が明確である。その中には、「一斉指導」と「個別指導」がある。それに対し、「共同学習」とは、参加した学習者が情報交換や質疑応答などを通して互いに学びあう形態である。その中には、交流を主とする「ふれあい」、学んだことを伝え合う「情報交流」、自分の考えを伝え合う「意見交流」、言葉や音、動き等で思いを表す「表現」、会議を主とする「打ち合わせ・相談」がある。

また、すでに諸先行研究で指摘されているように、テレビ会議の長所と短所はそれぞれ以下のようにまとめることができる。

【長所】学校内ではできない情報の入手、人との出会いがある／コミュニケーション能力、表現力が高まる／コンピュータリテラシーがなくても、コミュニケーションがとれる。

【短所】回線の状況に左右されやすい／時間の調整が必要（外国とのやりとりでは時差の問題も生じる）／時間がかかる（タイムラグの関係で発言と発言の間に間が空いたり、カメラワークに時間がかかったりする。音声や画像がうまく伝わらない時には聞き直しが必要となってくる）／参加者全員に参加意識を持たせることが難しい（司会や意見を言う学習者以外はその場にいるだけの状態になりがちで、課題意識もどうしても薄れてしまう。全体の課題として切実感を持って学びを深めるのは難しくなる）

テレビ会議だけを用いるのではなく、電話、電子メールや掲示板、ビデオレターや手紙など、時と場合、相手に応じてそれぞれの良さを生かした「選択」や「組み合わせ」を考えれば、短所を補うことができ、テレビ会議の持つ長所が生かされると考えられる。

本研究では、母語を異にし、異文化を背景に持つグループ間による、非正規授業<sup>1</sup>での「共同学習」という形態を取り入れた数回にわたる遠隔交流を観察対象にし、そこに現れるコミュニケーション・ストラテジーの特徴を分析することを試みる。

### 3. 調査方法

調査対象：学生主導の遠隔会議プログラム（「アジア学生ネットワーク」）

本会議は、アジア六大学をインターネットで結び、学生同士忌憚なく意見を交換することを目的に、2002年から継続中の実践授業である。このよ

うに長期にわたり定期的に外国語を使った交流ケースは少なく、異文化理解や言語習得研究の貴重な資料である。本研究は、筆者が台湾淡江大学側の会議支援教師を担当する期間中（2009 年 10 月～2010 年 1 月）合計五回の会議を分析対象とした。また、会議の様子はすべて録音、録画した。

【実施目的】 日常的なテーマについて学生に深く突っ込んだ議論の場を提供し、アジアの青年の相互理解を促進すると同時に、学生主体の会議運営と会議討論に必要な日本語（または中国語）の運用力を向上させ、また母語である中国語（または日本語）による発信力を高めることを目的とする。

【2009 年参加校及び各校の参加人数<sup>2</sup>】 淡江大学（6 名）、早稲田大学（7 名）、慶応大学（10 名程度）、北京大学（3 名）

【2009 年前期開催日程】

第一回：2009 年 10 月 29 日

テーマ：「アイドル」

言語：中国語

司会校：淡江大学

討論内容：「私のアイドル／アイドルに国境はある？／未来のアイドル像」

第二回：2009 年 11 月 12 日

テーマ：「いじめ問題」

言語：日本語

司会校：慶応大学

討論内容：「中国にいじめ問題はあると思うか／いじめに対する周囲の対応／インターネット上でのいじめ」

第三回：2009 年 11 月 26 日

テーマ：「もしオバマに会う機会があったら、どんな質問をするか」

言語：中国語

司会校：北京大学

第四回：2009 年 12 月 10 日

テーマ：「クリスマス」

言語：日本語

司会校：早稲田大学

討論内容：「クリスマスはどのように過ごすか／誰と一緒に過ごすか／自国では、どんな時、若者は共に過ごす相手がいないと特に寂しく思うか。そ

れはどうしてか」

第五回：2010年1月7日

テーマ：「裕福な家庭で育った子どもは人より良い教育を受けられるのか」

言語：中国語

司会校：慶応大学

討論内容：「お金持ちと良い教育を受けることには必然性はあるのか／私が感じた貧富の差と教育」

会議開催の一週間ほど前に、司会担当校が四校共通して興味を持てそうな話題を決め、他の参加校に知らせるようにした。他人の発言を理解しやすくなったり、自分の意見がうまく伝わったりするように、当日参加する学習者には、それぞれの話題に対してある程度の準備をしてくるよう指示した。また、毎回会議終了後に構造化アンケートに記入してもらった。アンケートには、交流がうまくできているかの振り返り、最も印象に残った発言、会議全体に対する意見などの質問が盛り込まれている。さらに、五回目の会議の後、淡江大学側の参加者、日本語学科四年生四名にフォローアップ・インタビューを実施し、「アジア学生テレビ会議」に対する意見を伺った。収集したアンケート及び全体終了後に実施したインタビューの内容を本研究の分析対象とした。

## 4. 結果と考察

### 4. 1 学習者側の感想

まず、以下で、淡江大学側の参加者を対象に実施したインタビューの内容を表にまとめる。

● 会議そのものについて
1. テレビ会議に参加するのはこれではじめてか？（似た経験がある場合、その形態及び実施形態を述べてください。）
①はい。はじめての経験だったため、新鮮だった。
2. 今回のテレビ会議に参加するきっかけは？
①日本語による口頭練習の良い機会だと思ったから。
3. 全体のセッティングに関する意見(参加学校数、参加人数、開催日時、開催頻度等)
①一時間程度の長さは外国語の練習にはちょうどいい。疲れないのがいい。
②時々発言時間の配分がうまくできていないため、発言権が一部の学校に握られてしまい、意見も主観的になりがち。
4. 日本語会議と中国語会議を両方設定したことについて。
①半々にしたら、準備の負担がそれほど重くならないし、自分の意見をちゃんと述べる

<p>ことができる。</p>
<p>②両方あってよい。お互いに外国語を用いて練習する機会が持てるから。</p>
<p><b>5. 会議のテーマが妥当かについて。もし変更できるなら、どういうふうに調整したいか。</b></p>
<p>①易しいテーマもあれば難しいのものもある。「クリスマス」の時は楽しかった。みんな親切だったし<sup>3</sup>。</p>
<p>②日常生活に関するテーマ、気軽に話せるテーマはもっとあってほしい。</p>
<p>③話題が難しすぎると、専門用語がたくさん出てしまう。その場合、十分な準備時間を与えてほしい。基本的な知識を把握するのに時間がかかるから。</p>
<p>● 会議前の関連事項</p>
<p><b>6. 会議前、どのように準備を進めるか。(特に工夫することはないか)</b></p>
<p>①与えられた議題について自分の知っている情報や知識を整理しておく。ほかは臨機応変に。</p>
<p>②中国語会議は特に準備したりしない。日本語会議の場合は、ちゃんとインターネットなどを使って関連する資料やニュースを調べておく。</p>
<p><b>7. 全員による事前会議を実施する必要があるか。</b></p>
<p>①本番の会議の15分～30分前に行うのはどうか。質問されてすぐに意見がまとまらないことがあるから。会議の直前の時間を使って同グループの参加者の意見をまとめるのはよいと思う。</p>
<p>②議題に関連する知識を事前に知っておけば、会議での意見交流がうまくいける。</p>
<p>③特に必要はない。</p>
<p>● 会議進行中の関連事項</p>
<p><b>8. 会議進行中、「参加学生の中の理想的なインターアクションのあり方」とは？(グループリーダーは必要か、発言権を均等に与えるべきかなど)</b></p>
<p>①議題について発言したい人は積極的に発言すればよい。しかし、発言回数が比較的小さい人には発言を促してみるのもよい。リーダーがいれば、リーダーに頼ってしまい、発言しなくなる。しかし、人数が多い場合、グループリーダーを立て、リーダーが発言順序を決める必要が出てくるかもしれない。</p>
<p>②暗黙の了解で発言権を回したりするほうがよい。リーダーが発言指定権を握っていれば、強迫して発言させられた感じが出てしまう。仲間が発言の途中とまどったりする場合、発言権を横取りしないで傍らからサポートするだけ。</p>
<p><b>9. 教師の会議における役割は？</b></p>
<p>①相手の発言が理解できなかつたり、適切な表現が見つからなかつたりする際の手助けをくれる。</p>
<p>②教師が教室にいたほうが安心して会議に臨める。</p>
<p>③教師がいたほうが会議はちゃんとした感じがする。突発事件が起きた際パニックにならずに続けられそう。</p>

10. 会議の時緊張することはあるか。適切に意見を伝えることができているか。自分の意見は他人に尊重されているか。
①日本語会議の時は、緊張したりする。
②参加者の間にインターアクションがあるとよい。相手の反応から自身を見直すことができるから。
● 会議後の関連事項
11. 会議の後、振り返りやフィードバックをしたりする？
①日中台三カ国の文化的相違や会議の時の様子を思い出したりする。
②会議が終わってからでも、ほかの参加者と話し合ったりする。
③特に振り返ったりはしない。
● 今後に生かすためのアドバイス
12. 学校内の遠隔教室設備に満足しているか。もし会議進行中機械トラブルがあった場合に、どのように対応すべきか。
①設備はなかなかいい。小さいほうの教室が好き。技術的なトラブルには即座に対応するのは難しい。
②機械トラブルが起こった場合、○×で答えられるような質問をするとよい。
13. 最も印象に残ったことは？
①「いじめ問題」。自分には実体験はないが、討論を通して各国の間に違いがあることを実感した。深刻な話題であるほど、各国間の違いが明らかのように感じる。
②音声トラブルが印象的だった。
14. 他の参加校から学べることは？
①慶応は話すスピードを落としてくれるなど、はっきりした話し方が安心感につながる。
②慶応は事前準備がよくできている。まじめだし、積極的に発言したりする。
③慶応。慶応側の留学生はお互いにサポートしたりするようである。
15. 会議に参加して一番大きな収穫は？
①異なる文化を背景に持つ人々との交流を通して、他人の考え方を知ること。
②言語運用上の学習（コミュニケーション・ストラテジーなど）。
③言語学習。
16. 最も改善すべき点は？
①発言と発言の間、間が空いてしまう。スムーズに行っていける工夫が必要。
②時間の把握。たまに発言が長すぎる場合がある。
③会議以外の時間にも交流できるような電子掲示板などがあればよい。
17. あなたにとって「理想的なテレビ会議のあり方」とは？実際参加してみて、想像したのとはどう違うか。
①フォーマルな会議かなと思った。実際に参加してみて、身近で気楽に討論できる話題もあれば、深いテーマもあってよかった。深いテーマの時、事前に同グループの人が集まる必要がある。

②全員がパソコンモニターを囲んで会議するのと思った。メッセージのように、発言する人はモニターの前に立って、音声も発言する人のだけ届けられるのと思った。映像も音声も全員で共有できるのがよい。
③ホールのような大教室とスタジオのような教室がある。スタジオのような教室の方がみんな近くに座っているから心地が良い。
<b>18. 課外活動として実施したテレビ会議の長所と短所について。(正規授業の一環として実施したものと比べて)</b>
<b>長所:</b>
①人数が少ないため、一人当たりの発言回数が比較的多い。
②学業成績など、教師の評価と関係がないため、リラックスして参加することができる。出来栄ばかり気にすることはない。
③自主性が高い。
<b>短所:</b>
①拘束力が足りない。
<b>19. その他の意見や感想</b>
①今回はアジアの学生を中心としていた。民族性にも興味があるから、欧米学生の参加を期待する。

上記の参加者意見からわかるように、会議のトピックは個人の趣向に関する軽めの話題が好まれていた。事前準備が必要であるため、参加者にとって楽しい話題であることが望まれていた。

また、接続トラブルに関する感想が多く寄せられた。お互いがストレスを感じている中、その状況に相手がいかに対応していたかということが強い印象として残っているようである。「相手は一生懸命話しかけてくれた」「こちらの音声状態が悪くても、相手はイライラせず、こちらの様子を気にかけてくれたり、音声途切れても討論に参加できるような工夫をしたりして本当によかった」などのように、トラブルが発生しても、相手が落ち着いて対応すれば問題が軽減されるといった感想が目立った。

そのほか、母語による会議に臨む姿勢に関しては、その母語の学習者である他校の参加者にわかりやすく伝えるために、話すスピードを緩めたり、大きな声ではっきりした話し方をしたりする工夫が見られた。話が盛り上がった時にそれを忘れてしまうこともあるが、お互いにゆっくりしたペースであまり難しい言葉遣いをしないよう注意する場面も観察された。

会議運営の支援者である教師は、会議において一定の緊張感と安心感を保たせることができるなどを理由に、学習者は教師の存在を必要としている。また、教師は突発事件への対応も試される。

#### 4. 2 教師側の感想

以下では、参与観察側でもある教師（筆者）がテレビ会議を通して感じたことをまとめる。

今回会議に参加した台湾人学習者は全員交換留学経験のある上級学習者であるため、「発音の正確さ」や「内容の理解度」には特に問題がないが、「事前準備は万全であるか」「学習者にとって興味が持てる話題であるか」は会議の進行に大きな影響を与えていると感じている。また、「くっきり、なめらかな映像であるか」「接続が途切れていないか」など、接続状況も会議の進行に影響している。

教師は、ストレスを感じることなく、目的が明確で、意味のある遠隔交流の環境づくりに力を入れるほか、学習者の参加意欲が高まるような内容設計、一回で終わってしまうのではなく、議論が深まりやりとりを続けていける工夫が必要だと思われる。また、全体連絡がスムーズにいけるよう、各校の担当教員が連絡しあう健全なネットワークづくりも、このようなテレビ会議を運営していくには不可欠であろう。

## 5. まとめと今後の課題

4章で述べられた結果からわかるように、実際、テレビ会議システムを通して、同じ世代の日本人学生や中国人学生と楽しく交流することで、ディスカッション能力の向上はもちろん、互いの考えや文化などを知ることができた。それに、知的好奇心が満たされ様々な知識が深まっていくことにより、学習動機が高まっていった。また、日本語による発話の中で自ら意図したことが相手に伝わった瞬間の喜びは達成感へと繋がり、それにより自己効力感が高められたり、中国語で日本人と会話し、日本や日本文化を理解できた楽しさは充実感へと繋がり、結果的に学習が内発的に動機づけられ、学習意欲が持続していったことがわかった。テレビ会議システムを活用しコミュニケーションする場を計画的に設定し、「表現したり理解したり」する活動を行うことにより、「伝え合う力」の育成に繋がると考えられる。

本研究は遠隔会議の実施状況や参加者の感想を報告するのみに留まったが、録音、録画データをもとに、コミュニケーションを円滑に運ぶために用いられるフィルターや協調的ストラテジーなど、異なった観点から本研究を述べることもできよう。テレビ会議システムを利用した言語教育の授業形態は、今後、日本語教育のバリエーションの一つとして、更なる発展が期待されるであろう。

### 注

1 本会議への参加は、正規授業の一環として実施した学校もあるが、筆者が勤務する淡江大学では、課外活動として実施した。学期初めの頃に学



部四年生を対象に参加者募集をかけた。また、リアルタイムの遠隔交流には高度な言語能力が必要とされるため、四年生のうち、特に交換留学経験者を優先させた。

2 多少参加者の入れ替わりがあるため、各回の参加人数は不定である。

3 四回目の会議では、前半音声トラブルがあったため、淡江大学側の音声が他校に届かず、ディスカッションに参加できない状況だった。その際、司会校は○×の手ぶりで答えられる簡単な質問をし、配慮してくれた。

#### 参考文献

佐々木真理、熊安娜 (2002) 「テレビ会議による中国・日本間の遠隔共同授業「日本語」における受講者の国際理解意識の形式」、日本教育情報学会年会論文集 18、p. 59-60.

砂岡和子、李利津 (2009) 「多人数インタラクションにおける母語話者の非協調的コミュニケーション特色」、第 23 回人工知能学会全国大会.

早川直子 (2004) 「海外日本語教育機関との遠隔日本語チュートリアルを試みーテレビ会議システムを用いてー」『日本語教育実践研究』創刊号、早稲田大学大学院日本語教育研究科、p. 169-178.

宮崎里司 (2002) 「接触場面の多様化と日本語教育：テレビ会議システムを利用したインターアクション能力開発プログラム」『講座日本語教育』第 38 分冊、早稲田大学日本語研究教育センター、p. 16-27.

八島智子 (2004) 『外国語コミュニケーションの情意と動機：研究と教育の視点』

呂念慈 (2004) 『華語視訊遠距教學活動設計：以日籍學生為例』、國立台灣師範大學華語文教學研究所碩士論文.